



美安五節圖

霜月の中より廿五日の海りなり火より  
 ほととぎす殿上今よりは蔵人頭よりおまへ  
 成よりあま節ともふりよりや節まのんせよはのを  
 五首あともたはねはせとまへははれ合ふらの小舎人  
 成よりあまたつねまはをいすのりたりといふまは  
 こまへはまのれなとおはせまはれはるあま節人二  
 志とくさせと北陣より免くら殿上今おまへ  
 免くらなり

明義門

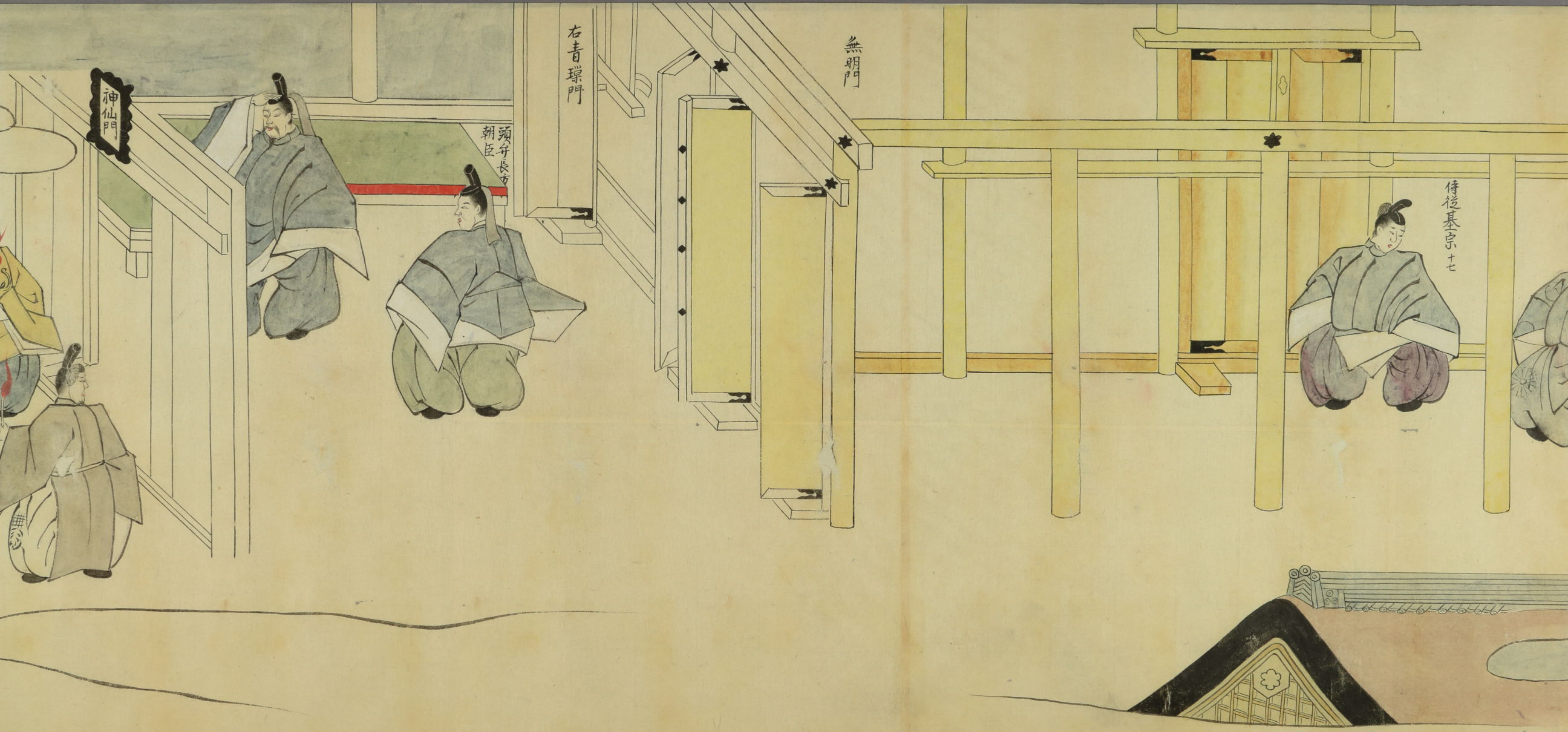
女将通資朝臣サ



本間文庫











主殿  
宿司

中將有方朝臣

中將頼  
實朝臣

中將通親朝臣  
廿三

神仙門

藏次官親宗

近江守  
秀能朝臣

藏合衛門  
權佐光雅

藏合守弟光

左中納言  
經房

侍從實明

侍從成家

兵衛佐正

左衛門實教

侍從伊補  
十七

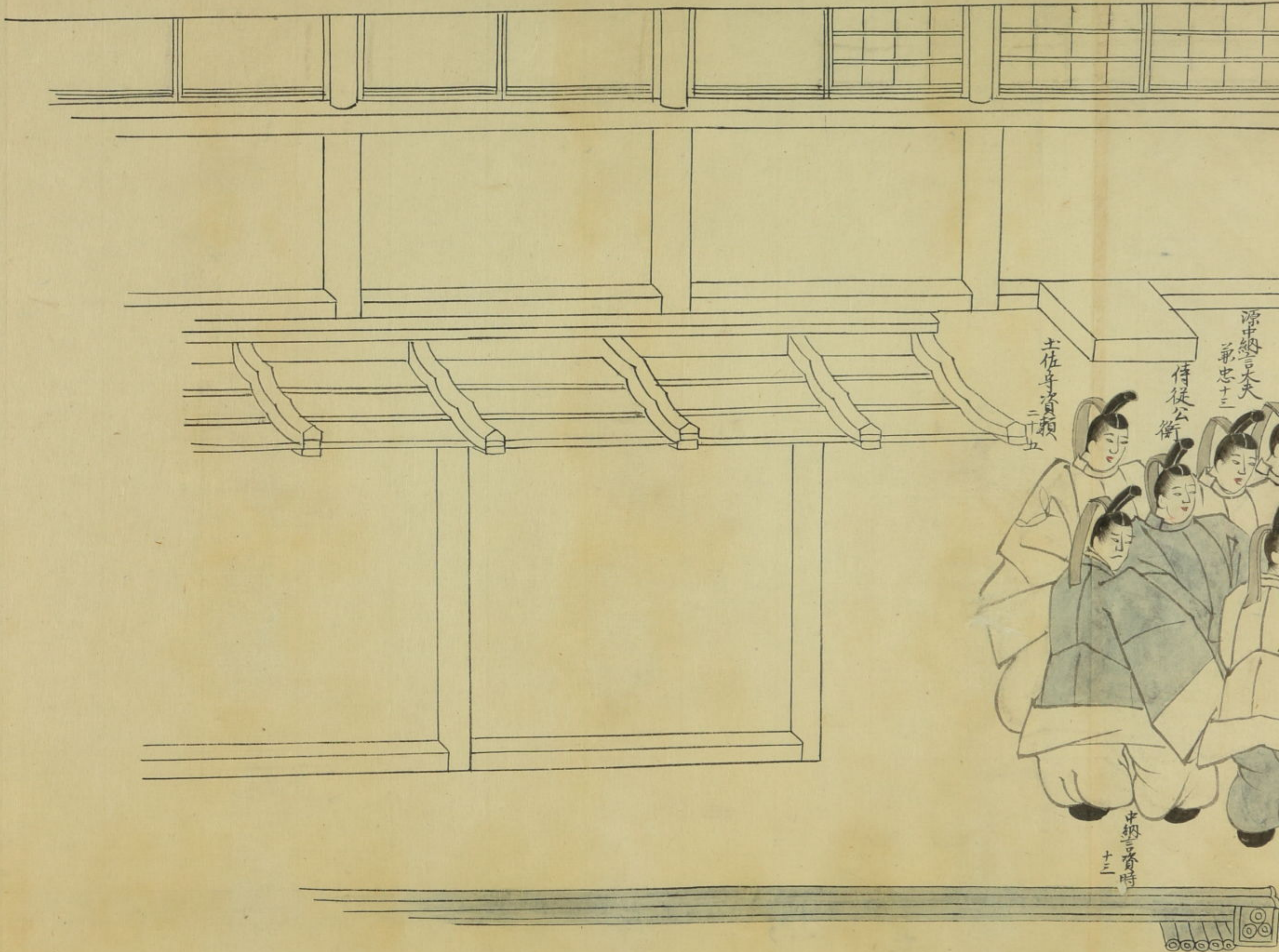
源中納言  
兼忠十三

侍從公衛

民部權中補  
宗雅



高道戸



北の陣下先々。及後涼殿のよ。うら哉

と改り高弘殿の細殿のま。登花殿の

前代とをり。玄暉の。ちと親てん共

毒戸は。り。藏人頭。花お。殿上人

新平の。ゆ。む。ひ。て。おの。く。ま。り。は。る

と。り。人。あ。い。う。こ。ら。ひ。る

人。か。こ。ひ。て。殿。上。の。ら。地。は。い。り。宣。耀。殿。の。あ。を

お。前。と。と。路。常。寧。殿。の。あ。を。お。前。と。と。路。共

や。う。は。あ。い。う。ひ。く。ま。し。を。登。花。殿。の。あ。を

ま。の。あ。あ。い。ん。五。は。ら

兼安元年は。り。あり





この家は徳川五子に  
兼安元年はりのあり





公衡  
十四

維盛  
十三

侍從公時  
十五

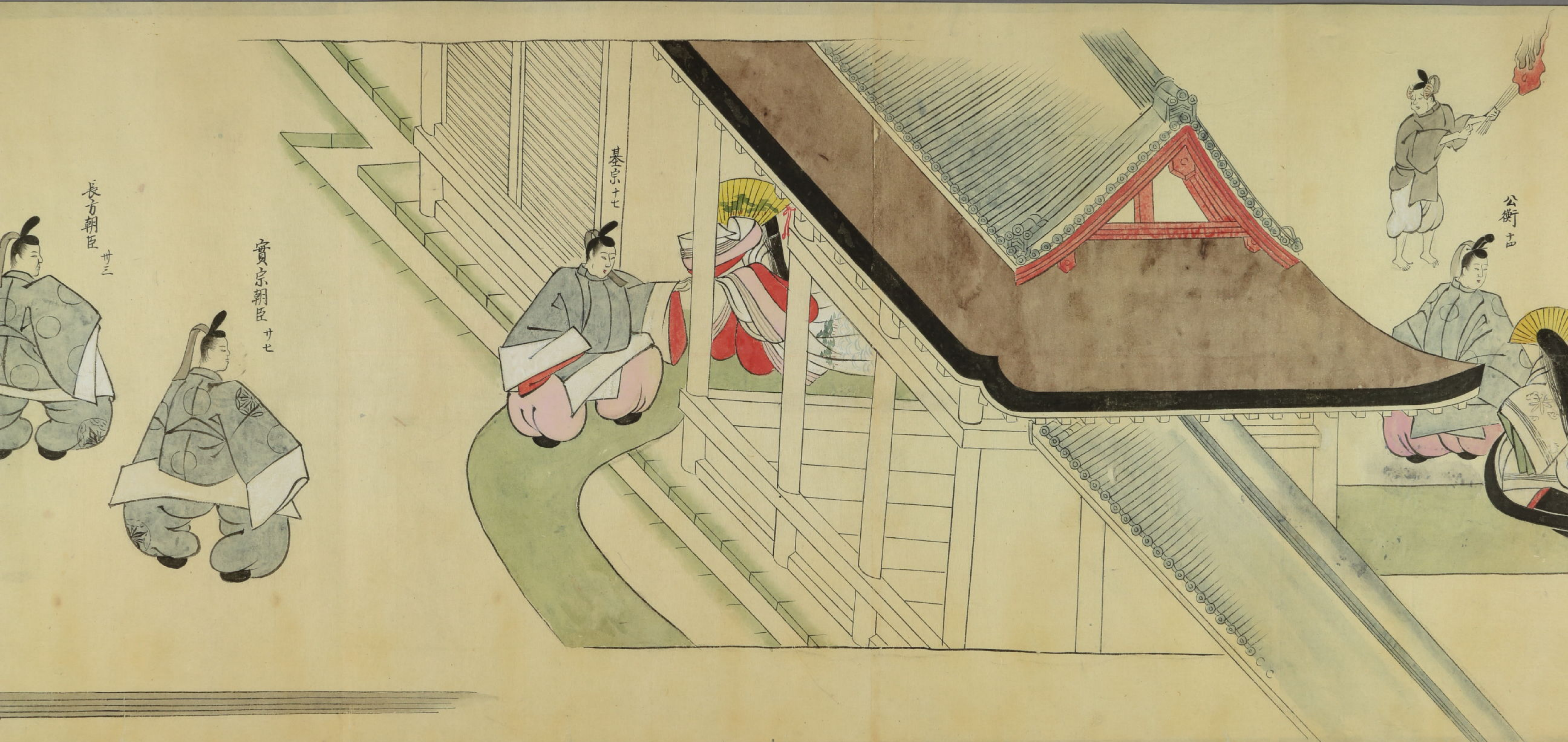
左頭親雅

經房

親宗  
十八

實教  
廿





長方朝臣 卅三

實宗朝臣 廿七

基宗 十七

公衡 十四



長方朝臣 廿三



五節とよよひていそとあはれあり

帳臺下 行幸かなを殿

上人城のく 志持く城

こゝろあはれおのる

水とまよ 関白城は

あはれく 志のろくを

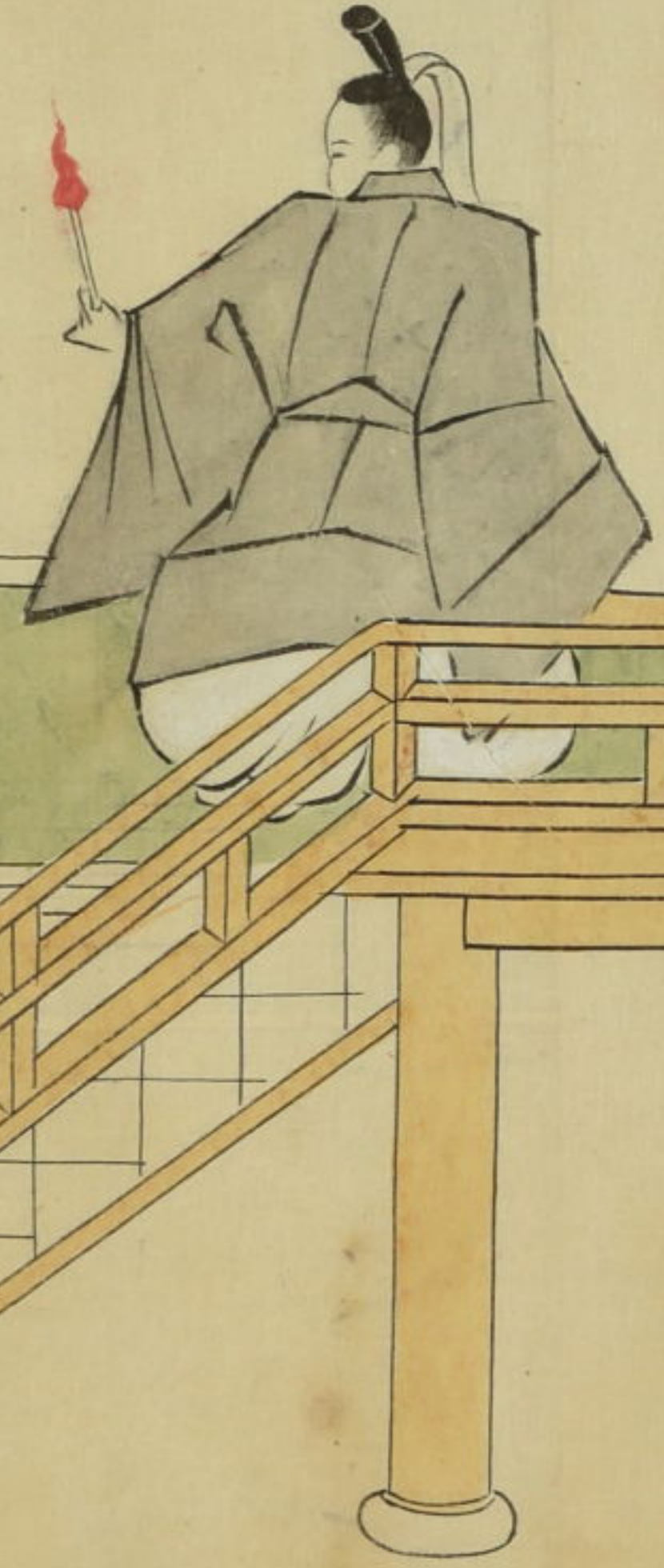
公卿のく 兼書殿城

と城をいふ所町の

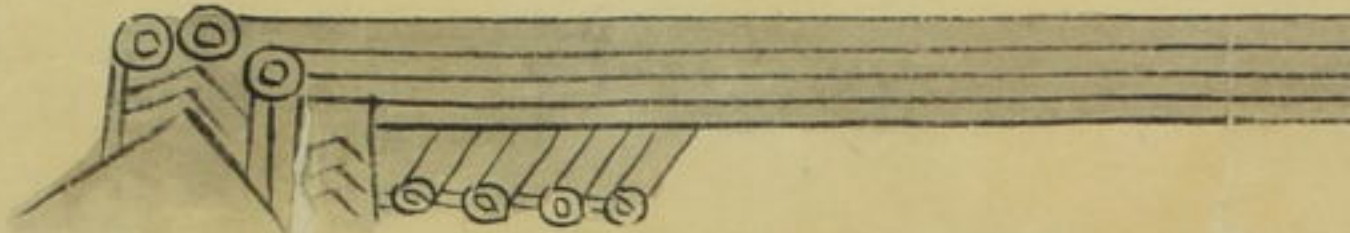
廊下をきき守殿下

あり城をいふ

前左衛門佐忠度朝臣



親信





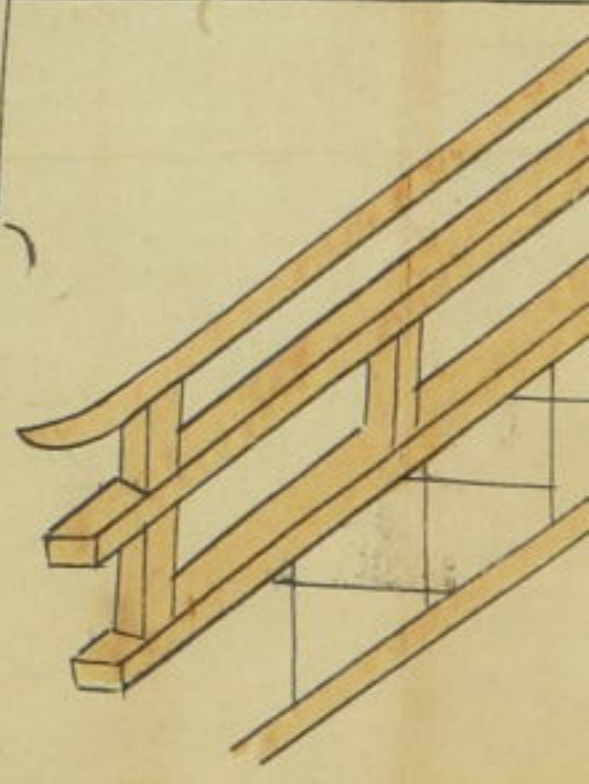
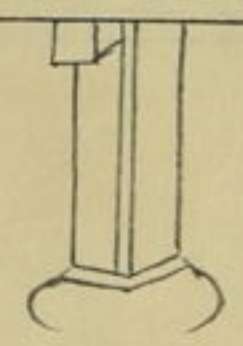
親信



松殿  
基房



假橋



附考玉海云兼安元年十月十九日己丑陰晴不定入夜雪灑月明此日五節參入也王上依御物忌不出御帳臺寬治三年例也抑雖御先服已後復辟以前猶為幼王三義縱雖不當御物忌何出御哉但寬治四年五節可勘見也同五年為有復辟之後故也則引檢寬治四年記之處所出御也御表日有先例云但於御物忌亥刻着直衣不出衣王上出御之時多出之執柄古仰是於今夜者強不備花露不衣可宜者隨御先着用之凡上賜并宿主人強不出之故可被人之意參內南殿御後弓場等參殿上先是內大臣左大將等候座相次左大臣被參子刻許五節參入天位國所之雅望朝臣

其後良久無音故刻之後頭中村實宗朝臣入自上戶告攝政不給之由於左大臣則左府已下經上戶并年中行事障子西件障子自長押屏廣庇攝政示氣色進行左相府已下相從攝政已下皆於新長橋西妻邊着沓各或子思或親昵殿上人今看之余頭將經同橋并乘杏殿南緣定能朝臣合看之

同中間后町廊等殿上指榻攝相從前後攝政常寧殿馬道南長押下

之同皆皆左府以下於階下脫已各經馬道有從道皆左府以下於階下脫已各經馬道入妻戶內侍書戶懸攝政奧疊被坐左府以下並居其前妻戶內際敷高麗帖一枚為扈從上達部然而人數多不加居件置也其後舞姬等次第參入各退歸了此同次攝政以下經本路被退各於脫沓左府內府安持等自后町廊邊被退出了本路御前攝政被候則被出了次余退出了抑隨身等臨其期廻瀧口方兼石仰之也殿上人取備履二間簀子邊候又於常寧殿取沓給隨身也隨身等經弘出微殿前皆進后町廊下也又還御之時於本著沓之取脫履也

中御門中納言宗家參入御覽新筆相賴定御覽美作雅隆朝臣參入相摸有隆御今日參內前以家季子送今夜舞姬裝束於中納言許相權件裝束依先日被請也又家季子定成等字為童女裝束遺之此外細事尤多



其後帳臺了舞の免も有り  
如家河上平殿上人右町忠





其後帳臺下舞い免もよひり  
ぬ家河より殿上人后町忠

廊下舞い進舞あり

いむさらましいらく

之とより舞  
いと可い  
あぬ

きよあぬ行孝

の后さ記

おね

帳臺のう路

ぬ舞は



后町廊

基宗  
公衛

隆房朝臣

有房朝臣

顕信朝臣

定能朝臣

泰通朝臣

通親朝臣





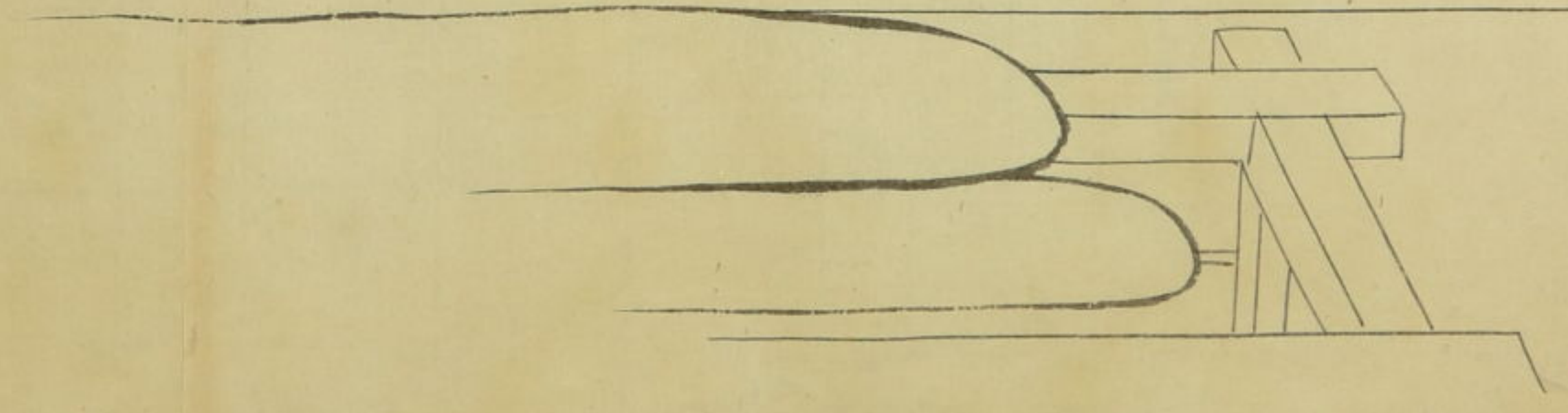
測 破 心 申 敷

ま ぶ せ け り の ち

む ま の と 記 せ ぬ 殿 上 人

とらのひの殿上は測破心  
なげくまよひのあこ免

后町廊







神仙門

仲基

惟頼











登華殿



附考玉海云兼安元年十二月廿日庚寅今日御前試也下官出仕

うゝぬれをさぬぬまひ

御前のさげのありとさげの

あゝん碑推泰不そり

まゝりて西東常まゝ

新始童

あゝん碑推泰

事は





附考玉海云兼安元年十二月廿日庚寅今日御前試也下官出仕

うゝぬゑとてあぬまひ

御前のさげとありとて話の

あゝ御推参なとて

あゝとて西東常とて

舞姫童

あゝとて御推参

まは

御前のさ

装束

なほ

殿上人お

清涼殿の

御前と先は

あゝとて御推参

のゝとて







卯日のいぬをきぬはきぬはいはいはのたけがなり

免りりりといぬきぬはわらいはりり清涼殿の孫光なり

関白以下大臣並三着座之後童子光のす志

兼香殿のいぬ井はすはほりりりをりりり

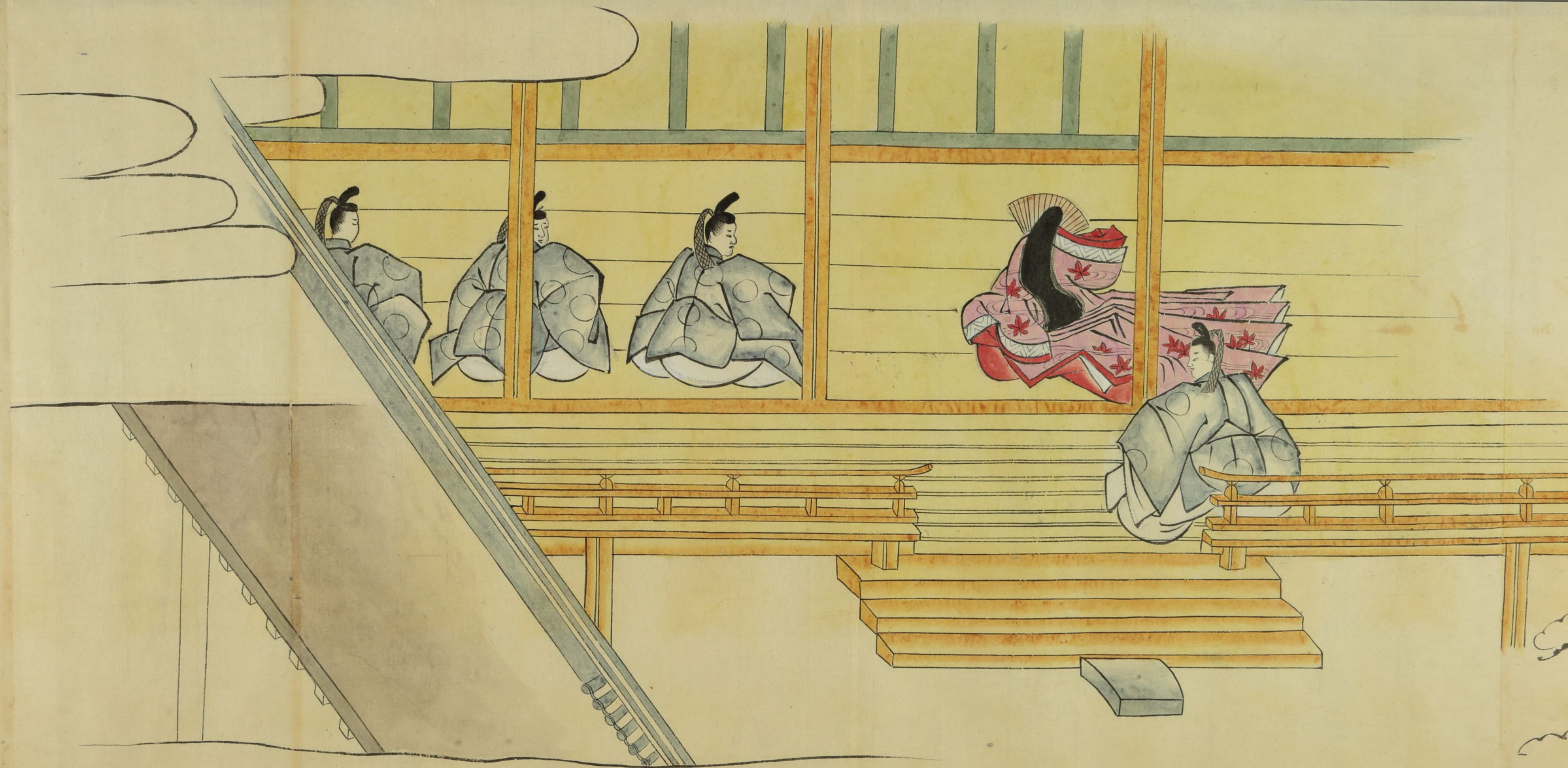
橘をりりりり蔵人座上人志法事なり

附考玉海云承安元年十月廿日辛卯天晴此日童女御覽也依先日催申判許着直衣出黄参内先参殿上方  
 内三奈大納言實房等在座小時頭中将實宗告出御由内府實房時忠等次第經上戸軒押行實子等各着  
 御前山坐次童女参上頼定御童中將頼實一付之相授此間漸次晴然依仰頼實取指燭参上高以時仍召掌燈  
 掌燈事也藏人仲基獨左右手持灯臺燭等参上依他人不候當御座間南柱也今一燈不持参仍下官催之  
 又藏人二持参之拳御座北間之裡了共無打散又灯臺之為體不足言奉行羈事頗無用意故預五位  
 殿上人役之而在五節形遣召之間可遲也仍隨使直於次下仕参上當童女後居庭中藏人取脂燭  
 候左右又童女落脂燭雖庭中檢清了之次依攝政命今置扇其後下仕合文尚不参被相  
 尋之處頼定御下仕遲参不可叶今日事三仍勿論各令持扇等如例到南第一間  
 各左廻退歸了下仕同歸去了次公御等自下廊起座帰着殿上座小持下官参御  
 前攝政被候頃之被退出了次余退出兼光語云頼定下仕  
 二人依論座次入江口等入今朝逐電仍忽難尋替事関  
 了三今日攝政被候篇中





辰日皇極殿前会あり大とあり西後  
らん地免殿上人東帯面より家巡り







中納言雅頼卿

参議頼定卿

参議中將實守卿

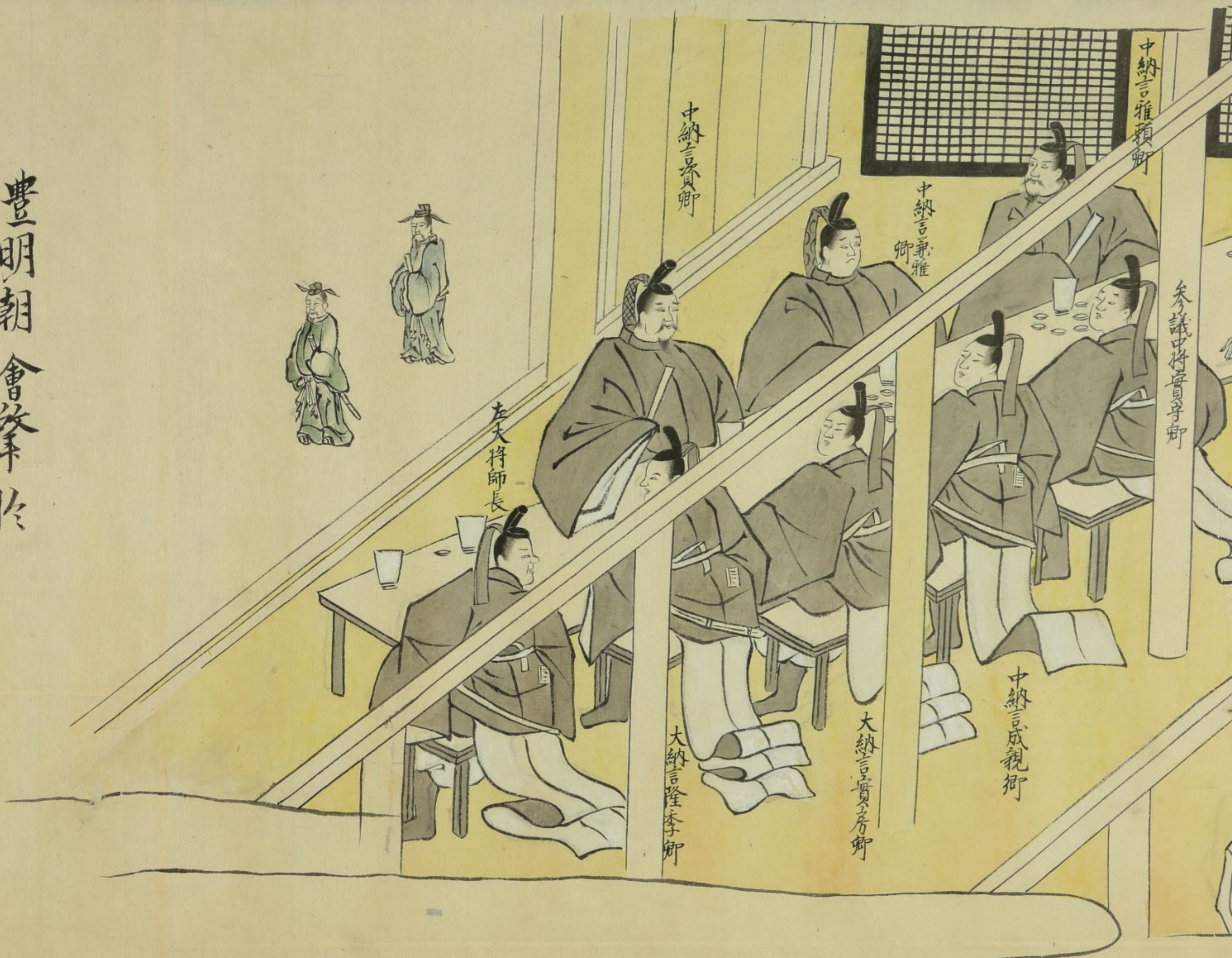
参議左大臣實綱卿

中納言忠親卿

中納言成親卿

辰巳の御前をありのりてのち  
 うらた先殿上人東帯の御前を巡りて  
 息袋紙つくとししすの御前を先童の御前  
 のほりてその比殿上人の御前を御前  
 へ御前を御前へ御前へ御前へ御前へ  
 妻戸の御前へ御前へ御前へ御前へ  
 ことごとし御前へ御前へ御前へ御前へ  
 ねがへ川平は信浄殿の御前へ御前へ  
 先人の御前へ御前へ御前へ御前へ  
 ねがへ





豐明朝會摩於

天武天皇芳野行宮曰循到于今也此卷  
 高倉天皇美安元年五節舞妓之因也當時  
 皇綑稍弛平氏恣權朝儀雖不如延天之  
 古禮文猶備焉去今六百餘年展之則一時  
 衣冠文物之盛繁然可觀矣此圖若別刺史  
 紀宗直之所藏借觀之序密寫一本以備考古  
 寶曆甲申其江世恭識

寬政元年四月十一日

松園辰方



寛政元年四月十日

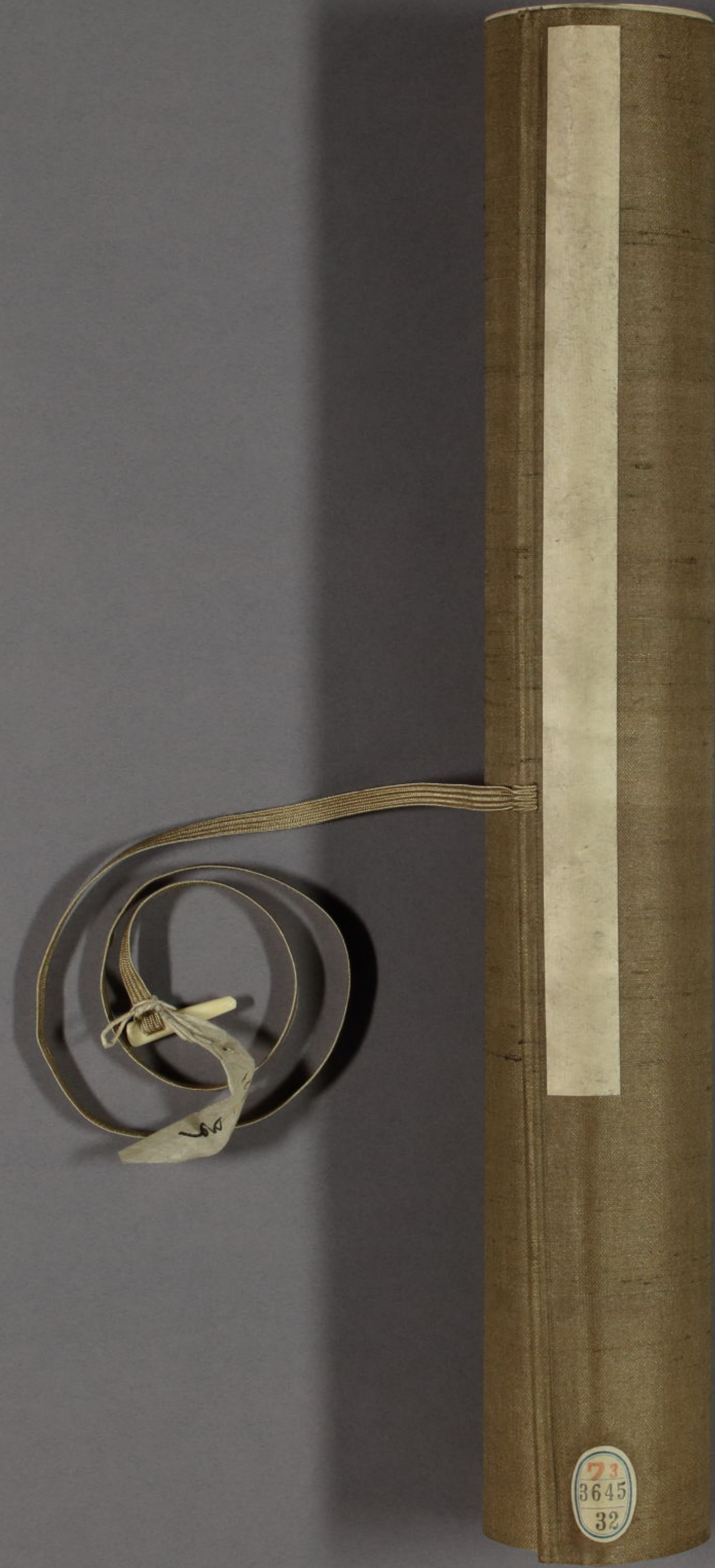
松園辰方

文政三年十一月日

本間百里











73  
3645  
32

# 美安五節圖

霜月の中より廿五日の海よりなる火と云は  
 ほとと殿と云ふりは藏人頭より好ましく  
 成すいあ五節とも云ふりや都まで見えよはのせ  
 五首のたはねは流るせと云ふりは都合から的小舎人  
 城といふあたつね半はと云ふりたりといふは  
 こまこまのれなむお海智あ小庭よれあも  
 志くさせく北陣より見くる殿と云ふり  
 免くるなり

本間文庫





1  
2  
2

*[Faint, illegible handwriting in cursive script, possibly bleed-through from the reverse side of the page.]*

